対称詞の使い分けかたの地理的分布

―『方言文法全国地図』を用いて―

小 畠　裕 将

1　はじめに

本稿は対称詞の待遇への語彙的な反映のさせ方とその地域差を明らかにすることを目的とする[1]。現代共通語では，聞き手を二人称代名詞で呼びにくく，特に目上の聞き手は二人称代名詞で呼べない。これには「敬意逓減の法則」と呼ばれる，時代が下るに従ってその語が持つ敬意が失われたことが影響している。

池上（1972）は中央語において目上を指す一般的な対称詞であった「おまえ」の待遇価が江戸後期から下落し，同等・目下にしか使用できなくなったと指摘する。加えて，同時期で敬意の高い対称詞は「あなた」と「おまえさん」であったことを池上（1972）や小松（1996）などが示している。これらのことから，「おまえ」の待遇価の下落に際し，目上を指す対称詞として「おまえさん」のように敬称を付すもののほか，「あなた」のようにより高い待遇価を持つ語形が使用されていたと推測できる。現代共通語では，最も丁寧な二人称代名詞と考えられる「あなた」は目上に使用できないまでに敬意が失われ，目上に使用できる新たな二人称代名詞も定着せず，「〇〇さん」など敬称を付した固有名詞や親族名詞，「先生」などの職業や役割を表す名詞によって目上の聞き手を指すようになっている。

では，方言における対称詞の待遇価はどのように変化したのか。大橋（1999）は，新潟県下の対称詞の種類と待遇価の史的推移について以下の点を指摘する。

- 二人称代名詞の品位の低下を補う方法として，「対称代名詞の世界内での補綴」（別な対称代名詞を用立てる，既使用の代名詞に上品位を表す接尾辞「サン」を補綴する）と，「別な原理での補綴」（身分呼称・名前呼称・感動詞呼称等）がある。
- それには地域差があり，その進行にも地域差がある。

新潟県内においても対称詞の推移には地域差がある。その他の地域における対称詞の推移についての研究は管見の限りみられないが，どのような形式を，どのように使い分けるかは全国的に見た場合，地域間で大きく異なると予想される。

国立国語研究所編『方言文法全国地図』第 6 集（以下，GAJ）には聞き手の異なる三つの場面について対称詞の使用語形を示した言語地図がある。本稿では GAJ における対称詞の言語地図をもとに，各場面の使用語形を総合した略図を作成する。原図およびこの略図をもとに，場面による使い分けかた（どの段階で対称詞を使い分けるか）と対称詞の品詞・語構成（二人称代名詞，二人称代名詞＋敬称，二人称代名詞以外の形式のいずれか）に着目し，中央語史を参照しながら，対称詞の使い分けの地理的分布について分析を行う。これによって対称詞の待遇への語彙的な反映のさせ方とその地域差を明らかにする。なお，GAJ は男性を対象としており，ここでの分析・考察は男性による対称詞の使い分けかたに限定される。

---

[1] 「対称詞」は品詞論的な「二人称代名詞」とは異なり，聞き手を指す機能的な概念として鈴木（1973）によって示された用語である。

２　『方言文法全国地図』を用いた対称詞の先行研究

GAJ は国立国語研究所が 1979-1982 年に調査を行い, 1989-2006 年に刊行された文法事象に関する全国規模の方言地図である。調査地点数は 807 地点に及ぶ。対称詞の項目は GAJ の第 333，335，336 図にある。質問文とそれぞれの場面設定は以下のものである。なお，この三つの設定場面は地域社会のあり方によって性格が異なり，また，インフォーマントによって場面の解釈に多少の幅があると思われる。前者については３節以降の分析・考察でも考慮する。

「これはお前の傘か」

・第 336 図：親しい友達にむかって言う（O 場面＝くだけた場面）

・第 335 図：近所の知り合いの人にむかって，ややていねいに言う（A 場面＝やや丁寧な場面）

・第 333 図：土地の目上の人にむかって，非常にていねいに言う（B 場面＝非常に丁寧な場面）

GAJ を用いた対称詞の研究としては，対称詞の地理的分布の史的展開を考察した彦坂（2011）がある。これを参考に GAJ の各場面における対称詞の分布を私にまとめると，おおよそ以下の特徴がある。

【O 場面（くだけた場面）】

・オマエ類が広く分布し，一部にアナタ類が見られる。

・東西端にワレ類，オヌシ類が分布する。

【A 場面（やや丁寧な場面）】

・オマエ類の分布が広く全国的に見られ，特に東日本に多い。

・オマエ類は西日本では敬称（サン・ハン）を付けた形が多い。

・アナタ類は，西日本に多く，東日本に少ない。

・代名詞でなく呼称・役割で呼ぶ言い方なども見られる。

【B 場面（非常に丁寧な場面）】

・アナタ類が広く全国的に見られ，敬称（サマ・サン）を付けた形も見られる。

・オマエ類が東日本に広く分布する。

・「先生」などの役職,「だんなさん」などの親族名詞と,「〇〇サン」などの固有名詞が東西の中心地に集中し，特に関東地方に顕著に見られる。

彦坂はこれらの分布特徴から，形式順はオヌシ・ワレ類の古態形式からオマエ類，さらにアナタ類とオタク・「その他」の類の進出が認められ，原理上は目上に代名詞の使用が避けられ,「その他」類が進出すると述べる。また地域上は古態形式が東西別の周辺分布，以後の諸形式が東部太平洋側から近畿・中国・九州へと逆Ｓ字型での進出模様が認められるとする。

また，永田（2015）は目上に二人称代名詞を使用できないという現代共通語の対称詞の体系に着目し，日本語の対称詞体系の歴史的な推移を明らかにしている。その中で，永田は GAJ における対称詞の分布についても分析を行っている。永田は GAJ における対称詞の体系について以下の点を指摘している。

・対称詞を使い分けない体系が全国の遠隔地，特に沖縄の離島に分布している。

・目上に対して二人称代名詞を使用しない体系が都市部に存在し，それを囲むように二人称代名詞を使い分ける体系が分布している。

・目上に「オタク」を使用する体系は二人称代名詞を使い分ける形式の周辺に分布している。

彦坂（2011）は場面間での語形の異なりについてはあまり触れていない。また永田（2015）は大まかな使い分けは示しているものの,「アナタ」と「オタク」以外の個々の語形は区別しておらず,

二人称代名詞に敬称を付した形式も特に区別せず二人称代名詞として扱うなど，詳細な使い分けについては示していない。本稿では，これらの先行研究では十分に扱われていなかった点を考慮し，品詞と語構成によって回答を類型化して場面による使い分けかたをみる。

３　使い分けかたの分布

３．１　対立語形数からみた使い分けかたの分布

図１に，使用語形を語構成によってまとめた対立語形数の分布を示す[2]。O，A，B いずれかの場面において無回答である場合，三つの場面における使い分けがわからないため，「無回答」としてまとめた。また，ooci など「家」を意味する語形も対称詞とは認められないため，いずれかの場面において使用される場合は「無回答」に含めた。otaku については聞き手の家を指している場合も考えられるが，対称詞としての機能も持つため，二人称代名詞として扱った。

場面による使い分けかたは，大きく a) 使い分けを行わない（34 地点），b) 二つの対称詞を使い分ける（451 地点），c) 三つの対称詞を使い分ける（222 地点）という三つのパターンに分類できる。

図１において，これらのパターンの分布は以下のようになっている。

a) の使い分けを行わないパターンは 34 地点と分布地点数が極めて少ない。山間部や全国の遠隔地に多く分布している。

b) は全国的に見られ，分布地点数も多い。

c) も b) と同様分布地点数が多く，全国的に見られるが，北関東から東北あたりは分布地点が少なく，やや西に偏った分布となっている。

これらのことから，一部の山間部や遠隔地を除き，待遇的な場面によって対称詞を使い分ける地域が全国的に多いことがわかる。また，東日本に比べ，西日本はより多くの語形を使い分ける傾向にあり，待遇に敏感であると考えられる。加藤（1973）は一般動詞の尊敬表現について，「西日本で尊敬表現が盛んなのに対して東日本ではあまり発達していない」とし，「福島県中部から東南，茨城・栃木全域にかけては尊敬表現はほとんど見いだせない」と述べる。また加藤（1977）では日本語の敬語を身内尊敬表現，他者尊敬表現，丁寧表現，無敬語の 4 段階に分類し，敬語の発達の程度が西日本では発達，東日本では未発達であるとする。西日本で場面によってより細かく対称詞を使い分けることはこうした敬語の発達度合いに類似する。

３．２　使い分けを行わないパターンの分布

使い分けを行わないパターンについては，地点数が少ないため略図は示さない。このパターンでは，「オマエ類」のみを使用するものが東北地方の北部や房総・伊豆半島，鹿児島など東西の周辺部に 17 地点分布する。また，比較的新しい二人称代名詞である「アンタ」のみを使用するものが近畿を中心として西日本に 13 地点見られる。そのほか，「ウバー」が琉球に 2 地点（宮古島平良，黒島），「ヌシ」が岐阜，「ワ」が石垣に 1 地点ずつ見られる。

[2] 言語地図の作成にあたっては，国立国語研究所による『方言文法全国地図』のデータおよびプログラムを利用した。

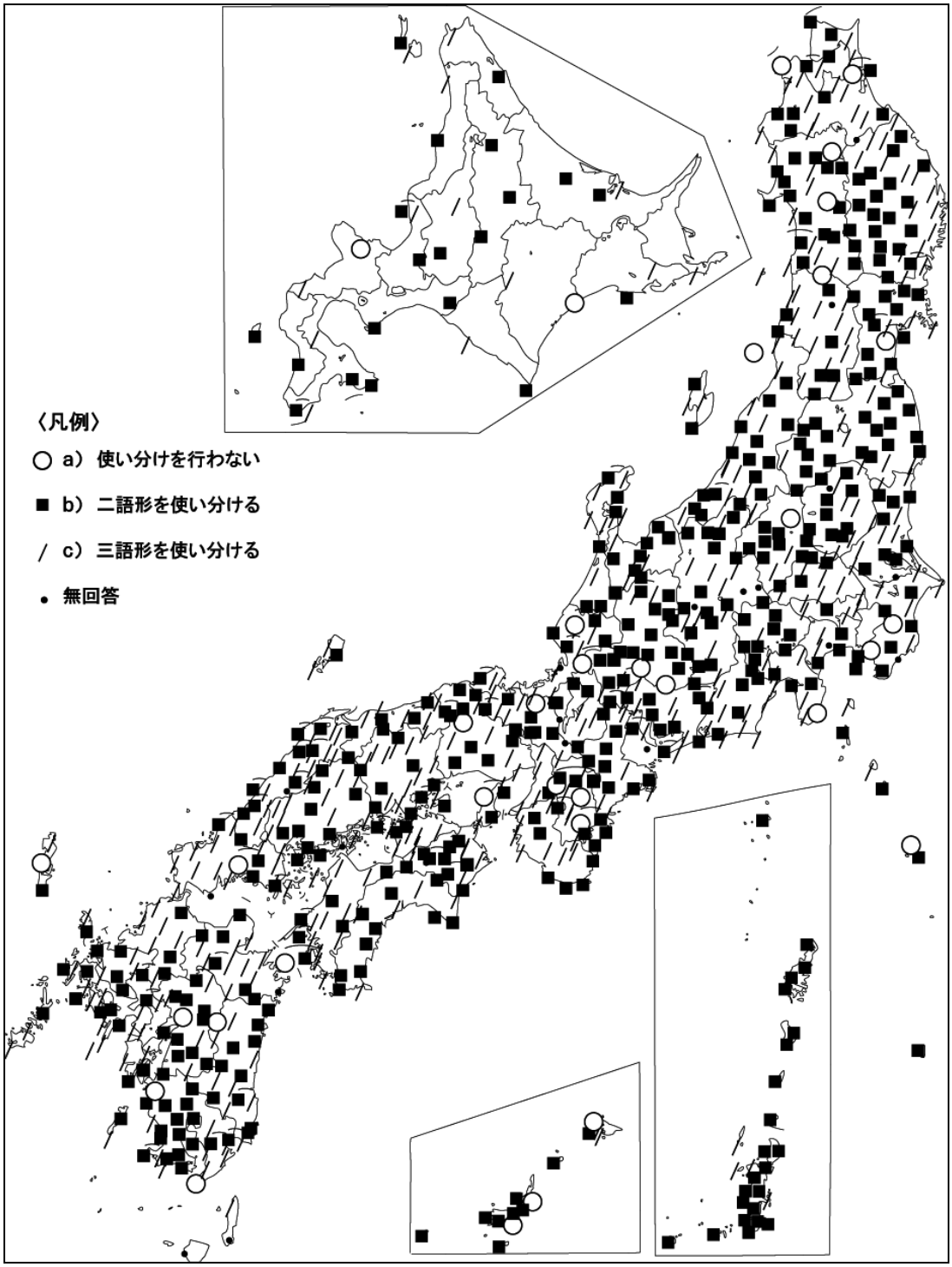

図１　ＧＡＪにおける対称詞の対立語形数の分布

３．３　二つの対称詞を使い分けるパターンの分布

二つあるいは三つの対称詞を使い分けるパターンは地点数，語形の種類が多様であるため，略図を示す。図の見出し語形については，転訛形は待遇差が認められるか否かによって区別するか統一するかを判断した。具体的には転訛によって待遇差を表す地域がほとんどみられなかった「オマエ」と「オメー」は「オマエ類」に統一し，待遇差が見られた「アナタ」と「アンタ」は区別する等を行った。

略図の見出し語形の統合の仕方をまとめると，以下の通りである（図２，図３に共通）。

オマエ類：nme,ohaɴ,oma,omae,omai,omaɴ,omi,ome,omea,omjaa,onmae,onmɛ,など

オマエ類＋敬称：ohaɴsa,omaesama,omaesaɴ,omahaɴ,omaisaɴ,omaisama,omaɴsaa,omasaɴ,omeesama,omeesaɴ,omɛhaɴ,omesaɴ,omjaasaɴ,onmɛsaɴ,onmɛsama など

アナタ：anaccaa,anada,anaɴta,anata

アナタ＋敬称：anadasaɴ,anatasama,anatasaɴ

アンタ：aata,aɴda,aɴɴda,aɴta,ata など

アンタ＋敬称：aatasaɴ,aɴdasama,aɴsaɴ,aɴtahaɴ,aɴtasama,aɴtasaɴ

オタク：odagu,otagu,otaku

オタク＋敬称：odagusaɴ,odakusaɴ,otakusama,otakusaɴ

キミ：kimi

ヌシ：nisi,nisja,nissja,nosi,nusi,onsi,onusi

ワレ：ware,wari,waru

ワイ：wai

ヤ：jaa,jado,jasaɴ,ʔja,ʔjaa

ナ：na,naa,name,naami,naɴ

ワ：wa,waa,

カ゜：ŋa,ŋaa

非代名詞：固有名詞（＋敬称），親族名詞，職業・役割を表す名詞

その他の代名詞：a,akko,daa,eŋa,kocira,kikoo,konada,koɴta,kore,kusama,socci,soko,sonada,sozira,temee,uɴ,una,ura,ubaa,uwaa,waŋa,ʔu,ʔura,ʔui,ʔuree,ʔuri など

また，全ての使い分けかたを地図上に示すことは難しいため，分布地点が 3 地点以下で，他に品詞・語構成が同じ使い分けがある場合には，個々の語形は区別せず，類型化して示す。例えば「O 場面／A 場面／B 場面」の使用語形が「キミ／オマエ／オマエ」「ナ／アンタ／アンタ」の場合，どちらも【代名詞１／代名詞２】型とした。

いずれかの場面において併用語形がある場合は，使い分けについても併用があるとみなす。例えば「O 場面／A 場面／B 場面」の使用語形が「オマエ／オマエ／アンタ・アナタ」の場合，【オマエ／アンタ】型と【オマエ／アナタ】型との併用とみなした。

二つの対称詞を使い分ける b) のパターンは使い分ける語形の数によって分類した三つのパターンの中で最も多くみられる。b) はより細かく類型化でき，次の四つのパターンがある。

b1) 二人称代名詞と，それに敬称を付す形とを使い分ける。

【代名詞１／代名詞１＋敬称】型（例：オマエ／オマエサン）（65 地点）

b2) 異なる二つの二人称代名詞を使い分ける。

【代名詞１／代名詞２】型（例：オマエ／アンタ）（341 地点）

b3) 二人称代名詞と，それと異なる二人称代名詞に敬称を付す形とを使い分ける。

【代名詞１／代名詞２＋敬称】型（例：ワ／オマンサー）（16 地点）

b4) 二人称代名詞と二人称代名詞以外の対称詞とを使い分ける。

【代名詞１／非代名詞】型（例：オマエ／○○サン）（42 地点）

図２は b) 二つの対称詞を使い分けるパターンの分布である。以下，b) の下位類型ごとに使い分けかたの分布を見る。なお，b) では【O／AB】型（A，B 場面で語形が共通）と【OA／B】型（O，A 場面で語形が共通）の二種の使い分けかたが存在するが，ひとまずこの点は区別せず，本節末尾で触れる。

b1)【代名詞１／代名詞１＋敬称】型では【オマエ類／オマエ類＋敬称】型（例：オマエ／オマエ／オマエサン）が b1) の全 65 地点中 61 地点を占める。愛知のような人口集中地域にも一部分布が見られるが，基本的には秋田・岩手の内陸部や新潟，岐阜・長野などの山間部，また山陰や高知，鹿児島など全国の遠隔地や山間部に多く見られた。残りの 4 地点は全て【アンタ／アンタ＋敬称】型（例：アンタ／アンタ／アンタサン）であり，b1) のパターンに「オマエ」「アンタ」以外の二人称代名詞は見られなかった。

b2)【代名詞１／代名詞２】型は b) の中で最も分布地点数が多い。その中でも最も多く見られたのは【オマエ類／アンタ】型（例：オメー／アンタ／アンタ）であり，全国に 184 地点分布していた。b2) において，より待遇価の高い「代名詞２」として使用されるものは「アンタ」が最も多く，229 地点に分布している。次いで「アナタ」が 41 地点，「オタク」が 20 地点に見られる。また，奄美では〈ヤー／ナー／ナー〉など，沖縄諸島では〈ヤー／ナー／ナー〉や〈ヤー／ウンジュ／ウンジュ〉などが見られる。分布地点が少なく，地図上には示していないが，先島諸島では jaa，daa，waa，ubaa などが使い分けられている。しかし地点によって語形の待遇的な上下関係が異なり，それぞれの語形に明確な待遇差が存在するかは本資料から確認できない[3]。

b3)【代名詞１／代名詞２＋敬称】型（例：ワ／オマンサー／オマンサー）は四つのパターンの中では最も分布地点が少ない。個々のパターンは地点数が少ないため地図上に示していないが，より高い待遇価の「代名詞２＋敬称」では「オマエ類＋敬称」が 9 地点と最も多く使用される。その場合，より待遇価の低い「代名詞１」で使用される語形は分布地点数が少ない「ワ」「ワレ」「ワイ」「ヌシ」「キミ」であった。また「代名詞２＋敬称」で「オマエ類＋敬称」に次いで多かったのは 6 地点に見られた「オタク＋敬称」であり，この場合分布地点数の多い「オマエ類」と「アンタ」が「代名詞１」で使用されていた。

b4)【代名詞１／非代名詞】型（例：オマエ／○○サン／○○サン）は近畿以西には 6 地点しか分布しておらず，関東とその周辺部に分布が偏っている。また，相対的に待遇価の低い「代名詞１」の語形としては「オマエ類」の使用が際立って多い。

これらのことから，二つの対称詞を使い分ける場合，二種の二人称代名詞を使い分けるパターンが全国的であり，待遇価の高い語形として敬称を付す形式や二人称代名詞以外の形式を用いるパターンは分布域が限られたものであると言える。先述したように，待遇価の高い語形としては敬称を付した語形，より高い待遇価を持つ語形，二人称代名詞以外の形式などが考えられるが，二つの対称詞を使い分ける場合，その選択には明確な地域差が見られることがわかる。

---

[3] 永田（2015）はこれらの地点について「単一対称詞が全国の遠隔地，特に沖縄の離島に集まって分布している」としているが，使い分けを行わないとは言い難い。

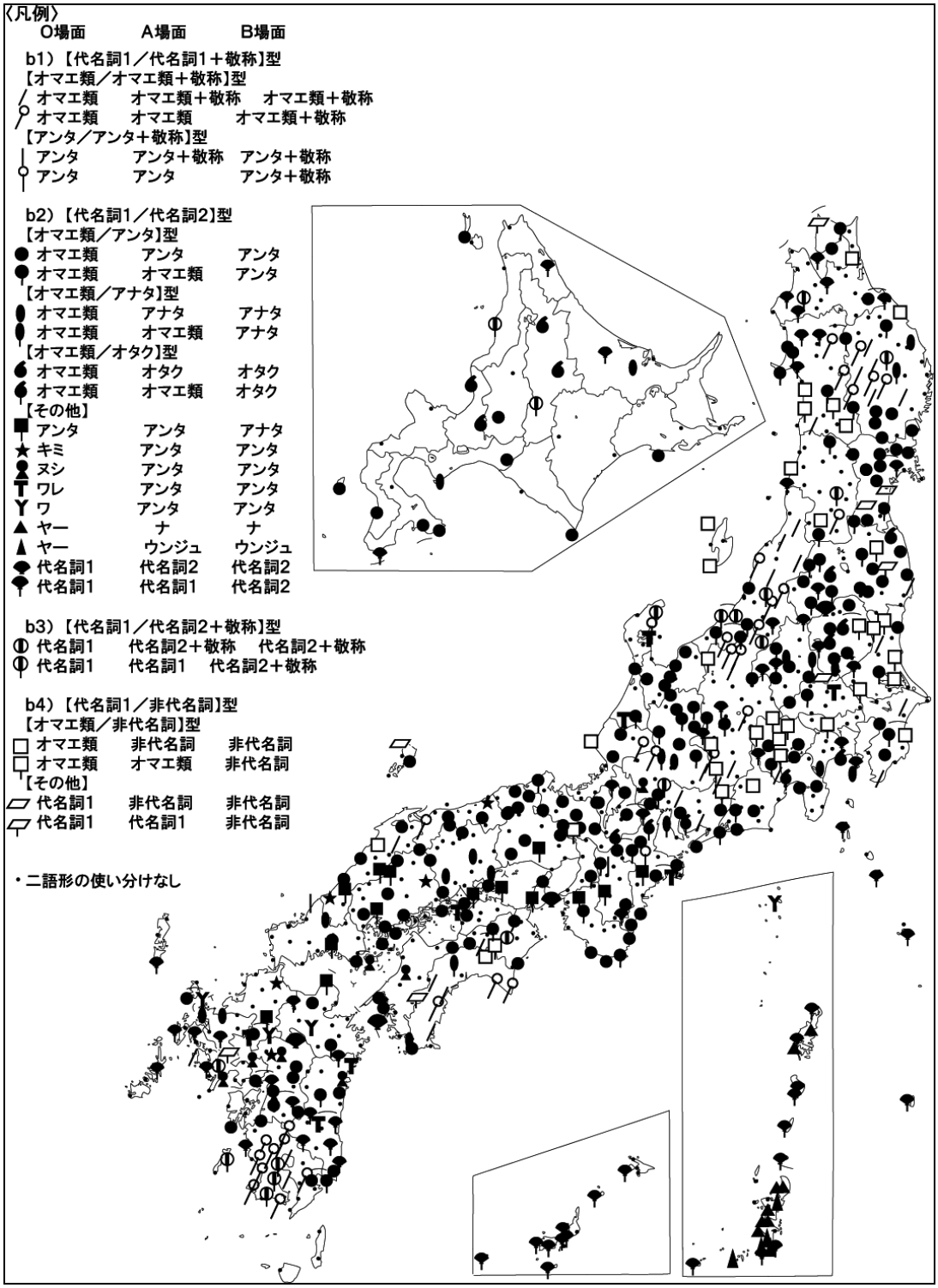

図２　ＧＡＪにおける二つの対称詞を使い分けるパターンの分布

また，場面による語形の使い分けかたとしては【O／AB】型（A，B 場面で語形が共通する）が多く，336 地点に見られ，【OA／B】型（O，A 場面で語形が共通する）が 126 地点に見られた。【OA／B】型は近畿以東に多く分布し，中四国・九州では B 場面で語形を切り替えるものは「オマエ類」と「オマエ類＋敬称」を切り替える鹿児島以外にはあまり見られない。近畿や中部においては【OA／B】型もある程度みられるものの，東日本に比べ西日本の方がより低い待遇場面で語形を切り替える傾向にある。二語形の対称詞を切り替える待遇場面に東西差があり，西日本がより待遇に敏感である点は，３．１で述べた西日本がより細かく対称詞を使い分ける点と類似している。対称詞の使い分けの地域差は加藤（1977）の指摘する西高東低の敬語の発達度合いに沿うものだと言える。

３．４　三つの対称詞を使い分けるパターンの分布

図３に c) 三つの対称詞を使い分けるパターンの分布を示す。待遇的に異なる三つの場面全てで使い分けを行うこのパターンは最も待遇に敏感だと言える。図の見出し語形，品詞・語構成による類型化は図２と同様である。

３．１で述べたように，三つの対称詞を使い分けるパターン全体の分布は東日本の分布地点数が少なく，やや西に寄った分布となっている。B 場面での使用語形を基準にすると，c1)【B 場面＝代名詞】型が最も多く，東日本にはやや分布地点が少ないものの，全国的に 259 地点に見られる。c2)【B 場面＝代名詞＋敬称】型は語形によってそれぞれのパターンの分布に偏りがあり 98 地点に，c3)【B 場面＝非代名詞】型は東日本にまとまって 63 地点に分布している。

c1)【B 場面＝代名詞】型のうち，多くが三つの代名詞を使い分ける【代名詞１／代名詞２／代名詞３】型である。中でも〈オマエ類／アンタ／アナタ〉のパターンは図３で最も多く，九州南部を除いた西日本一帯に分布する。これと O 場面の語形が異なる〈ヌシ／アンタ／アナタ〉と〈ワレ／アンタ／アナタ〉のパターンは地点数が少ないが，どちらも四国の西部から大分・長崎まで分布する点で共通する。〈オマエ類／アンタ／オタク〉は関東・東北から島根・岡山・香川までに多く，それ以西にはあまりみられない。これと O 場面の語形が異なる〈ワレ／アンタ／オタク〉や A 場面の語形が異なる〈オマエ類／アナタ／オタク〉は分布地点数が少なく，関東・東北の分布がほとんど見られないが，西日本の分布域はおおよそ類似している。このほか〈カ°／オマエ類／アンタ〉が青森から秋田北部にまとまって分布している。

【代名詞１／代名詞２／代名詞３】型以外のパターンでは，代名詞＋敬称を A 場面で用いるものとして〈オマエ類／オマエ類＋敬称／アナタ〉が岩手・山形や鳥取，長崎にみられる。また〈オマエ類／オマエ類＋敬称／アンタ〉が中部と中四国の東側に分布し，近畿を挟んだ東西に見られる。〈オマエ類／非代名詞／アナタ〉など，A 場面で非代名詞を用いるものも中部や中四国に分布している。

最も改まった場面で二人称代名詞に敬称を付した形式を用いる c2)【B 場面＝代名詞＋敬称】型の分布は，ほとんどのパターンが【代名詞１／代名詞２／代名詞２＋敬称】型である。〈オマエ類／アンタ／アンタ＋敬称〉が山陰から近畿と関東・東北の東側にみられ，〈オマエ類／オタク／オタク＋敬称〉は近畿以東，特に山形と宮城にまとまって分布している。このほか〈ワイ／オマエ類／オマエ類＋敬称〉が鹿児島・長崎の沿岸部に集中している。

c2)【B 場面＝代名詞＋敬称】型のその他のパターンは複数分布するものが少ない。これは，〈代名詞１／代名詞２／代名詞３＋敬称〉のように，余剰な区別をしているものが多く，安定した使い分けかたとはみなしにくいことと整合する。これらの中で唯一〈オマエ類／アンタ／オタク＋敬称〉

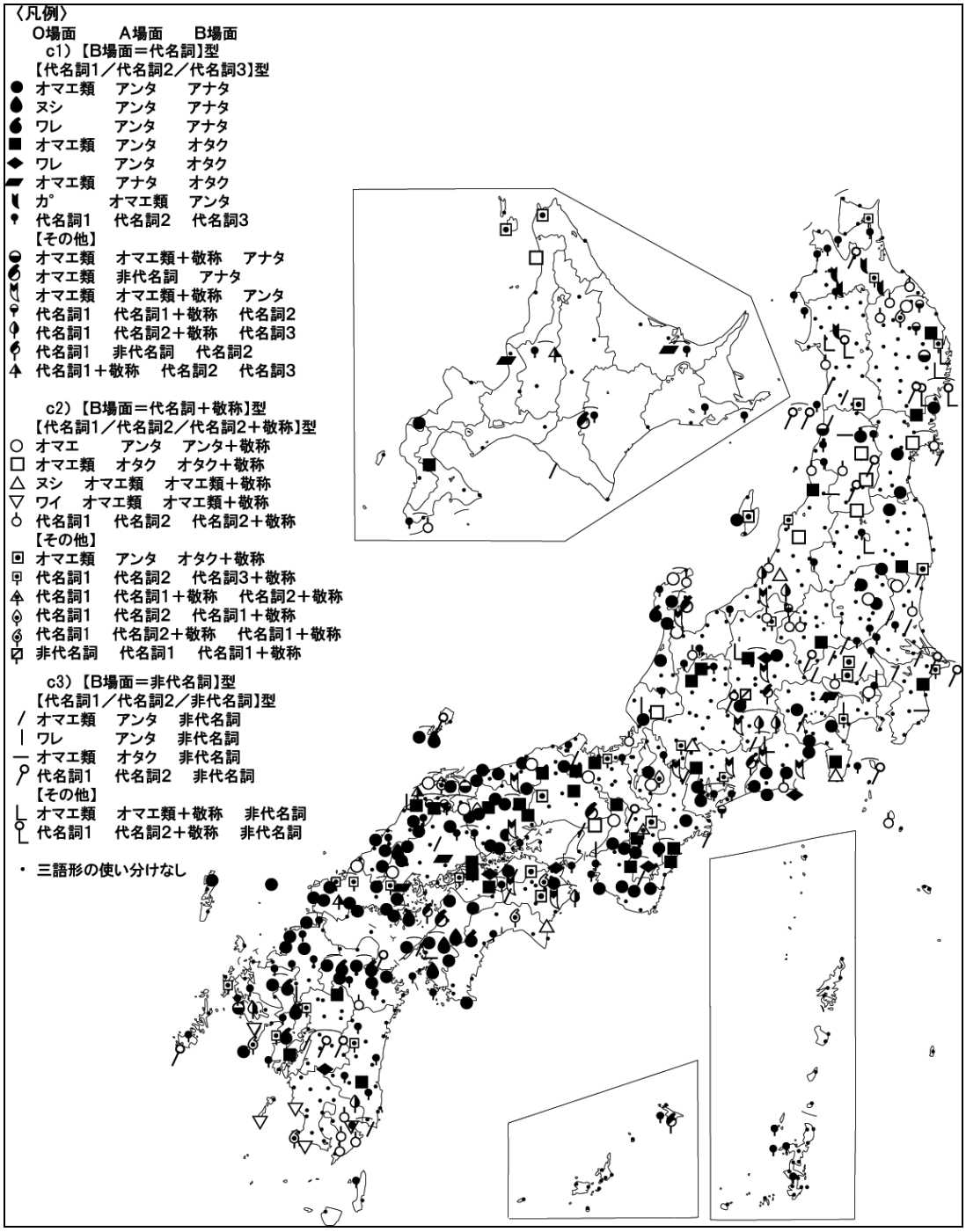

図３　ＧＡＪにおける三つの対称詞を使い分けるパターンの分布

は一定数の分布が見られた。ただし，この「オタク」に付された敬称は敬意を付与するためだけではなく,「オタク」が「家」ではなく聞き手自身を指していることを示す機能を持つとも考えられる。

c3)【B 場面＝非代名詞】型は【代名詞１／代名詞２／非代名詞】型が多くを占める。〈オマエ類／アンタ／非代名詞〉は関東・東北に多く分布するほか，東海から九州にかけてもまばらに見られる。このほかのパターンは地点数が少ないものの，〈ワレ／アンタ／非代名詞〉は近畿に，〈オマエ類／オタク／非代名詞〉は関東・東北に主に見られる。二種の代名詞を使用しないものとしては，〈オマエ類／オマエ類＋敬称／非代名詞〉のように A 場面で代名詞＋敬称を用いるパターンが東北に集中して分布する。

以上の点をまとめると，東日本では三つの対称詞を使い分けること自体が少なく，また最も高い待遇場面では代名詞に敬称を付すか代名詞以外の形式を使用する地点が多い。それに対し西日本は三つの対称詞を使い分ける地点が多く，また地点によって多様な使い分けパターンが存在する。さらにそのパターンの分布は中部から九州北部に及ぶもの，東日本から連続するが島根・岡山・香川以西には見られなくなるもの，近畿を挟んで東西に分布するものなど様々である。

また，c1)【B 場面＝代名詞】型に〈オマエ類／オマエ類＋敬称／アナタ〉と〈オマエ類／オマエ類＋敬称／アンタ〉があることを前述したが，「アンタ」「アナタ」よりも「オマエ類＋敬称」の待遇価が高い〈代名詞／アンタ／オマエ類＋敬称〉も合わせて 6 地点存在した（それぞれの分布地点数が少なく，地図上には示していない)。「アンタ」「アナタ」と「オマエ類＋敬称」の相対的な待遇価は全国で統一されていない。

４　使いわけかたの共時的な解釈

３．２から３．４では待遇的に対立する語形数に分け，それぞれの使い分けかたの分布を見てきた。ここでは３．２から３．４で得られた結果を総合した解釈を行う。

まず全国的にみられる特徴として，O 場面ではほぼ全ての地点で二人称代名詞が使用されることがあげられる。各地方言における二人称代名詞は親しい友人に使用できる程度の待遇価は保持しており，むしろ親しみの表示として二人称代名詞が機能していると考えられる。また，使い分けがない場合に使用されていた語形は「オマエ」「ウバー」「ヌシ」「ワ」など周辺の地点において相対的に待遇価が低いものが多い。ただし，近畿ではどの場面でも「アンタ」を使用する地点があったが，近畿周辺での「アンタ」は二つの対称詞を使い分ける場合は相対的に高く，三つの対称詞を使い分ける場合は中間的な待遇価である。

概括すれば，a)（使い分けを行わない），b1) と c2)（最上位待遇形が「代名詞＋敬称」）が山間部や遠隔地，b4) と c3)（最上位待遇形が「非代名詞」）が関東周辺，c1)（3 語形を使い分け，最上位待遇形が「代名詞」）が西日本，b2)（2 語形を使い分け，上位待遇形が「代名詞」）が全国的に分布すると言える。言い換えれば，全国的には二つの二人称代名詞を使い分ける地点が多いものの，山間部や遠隔地は新たな二人称代名詞の使用に消極的で，関東周辺では代名詞以外の形式も上位待遇で使用し，西日本では使い分けを細かく行うという地域差がみられる。

また一見して分かるように，全国的に分布地点が多いパターンでは全て「オマエ類」が使用されており,「アンタ」を用いたものも多くみられる。くだけた場面で「オマエ類」を使用することを基準として，あらたまった場面で「アンタ」を使用するか，他の形式を使用するかという点が地域差に大きく関わると言える。

個々の語形をみると，代名詞を使い分ける場合,「オマエ類」よりも「アナタ」の方が高い待遇

価をもつことが全国的に認められる。「オマエ類」，「アンタ」，「アナタ」の使い分けは，b2)【オマエ類／アンタ】型が全国的にみられ，c1)〈オマエ類／アンタ／アナタ〉が中部から九州北部に多く見られた。これらの分布で共通する中部から九州北部に関しては，「アンタ」が中間的な待遇場面から高い場面まで広く使用できるものでありながら，高い待遇場面では「アナタ」も使用されうる。一方で，関東・東北では〈オマエ類／アンタ／アナタ〉があまり見られず，【オマエ類／アンタ】型優位となっている。

また，b2)【オマエ類／アナタ】型は東海や山陽に，b2)【アンタ／アナタ】型は近畿南部から九州北東部に見られるが，b2)【オマエ類／アンタ】型や c1)〈オマエ類／アンタ／アナタ〉に比べ，地点数が明らかに少ない。「オマエ類」と「アナタ」では待遇的に開きがあり，「アンタ」は親しい友人に使用するほどくだけた語形ではないとする地域が多いようである。

これら「アンタ」「アナタ」を相対的に高い待遇場面で使用する地域と相補的な分布となっているのが，東北・新潟や鹿児島にまとまってみられる b1)【オマエ類／オマエ類＋敬称】型，関東・東北に分布する b4)【代名詞／非代名詞】型や c3)【B 場面＝非代名詞】型，山形・宮城にみられる c2)〈オマエ類／オタク／オタク＋敬称〉型である。b1)【オマエ類／オマエ類＋敬称】型を除けば，これらの地域は固有名詞や親族名詞，職業・役割を表す名詞など二人称代名詞以外の語の使用，あるいは比較的新しい二人称代名詞である「オタク」に敬称を付すことで上位待遇を表している。しかし，c2)〈アナタ／非代名詞／オタク＋敬称〉はあまり見られず，c2)〈オマエ類／非代名詞／オタク＋敬称〉が多く分布している。高い待遇場面で非代名詞や「オタク＋敬称」を使用する地点でも，「アナタ」はくだけた場面で使用されていないことがわかる。「アナタ」は単純に待遇価が下がったわけではなく，親疎の「疎」の要素は保持したままであったために，あらたまった場面，くだけた場面のどちらでも使用できない語形となったと考えられる。

永田（2015）は現代共通語と同様の，目上に対して二人称代名詞を使用できない対称詞の体系が国定国語教科書（1903-1947 年）や昭和前期（1926-1945 年）の資料において成立しているとしている。基本話者生年（約 92%）が 1899-1921 年の GAJ において，関東とその周辺部には共通語と同様の使い分けのパターンが見られることがわかる[4]。

５　使い分けかたの通時的な関係

４節では，地域ごとの使い分けかたを確認した。ここでは，使い分けかたの通時的な関係について考察する。

語形と中央語史との対応からみると，GAJ における「ヌシ」，「ワレ」，「オマエ」，「アナタ」といった具体的な語形は中央語史上に現れるものである。それらの分布は彦坂（2011）が指摘するように中央語史上の新古関係とも対応し，周圏論的解釈が適用できる。

個々の語形間の待遇差については前節で，全国的に共通して「オマエ」よりも「アナタ」が高い待遇価をもつと述べた。これは山崎（2004）や永田（2015）が示す近世後期の上方語や江戸語における「オマエ」と「アナタ」の待遇差が各地域においても保持されていると言える。また，「アナタ」と「オマエサン」を使い分ける地域は極めて少なかった。これは両者の相対的な待遇関係が曖昧で

[4] 彦坂（2011）は人口増加率と B 場面の分布を重ね，非代名詞が人口集中地域または海沿いにあると指摘している。しかし，人口増加率の高い大阪や愛知などには非代名詞形がそれほど見られず，長野南部や山梨など人口増加率の低い内陸においても非代名詞が使用されている。非代名詞は関東・東北を中心として中部以東に偏って分布していると考える方が自然であろう。

あったことによると考えられる。小松（1996）は近世後期江戸語について，ともに最高段階の対称であった「アナタ」と「オマエサン」について，後期江戸語での量的関係は「初めのうちはアナタが優勢，天明年中にオマエサンが優勢となり，幕末再びアナタが多くなる」とする。「アンタ」・「アナタ」と「オマエ＋敬称」を使い分ける地点が少ないことは，後期江戸語においても関係が曖昧であったように，各地方言においても待遇差をつけにくかったためと推察される。

使い分ける語形数からみると，４節で述べたように a) 使い分けを行わないパターンが山間部や遠隔地に分布し，c) 三つの対称詞を使い分けるパターンの分布が西日本に偏る。いわゆる周圏型分布であり，分布解釈の原則に従えば a→b→c という通時的な順序が導かれるが，中央語の歴史的研究の成果をふまえると，そのような変化が実際に起こったとは考えにくい。中央語における対称詞の使い分けについて，池上（1972）が奈良時代において「いまし・まし・みまし」が相手に対する敬意を込めて用いられるとし，永田（2015）は王朝文学において目上の男の聞き手に対して「殿」を使用すると述べる。GAJ とは語形が異なるものの，中央語では古代から対称詞の使い分けが存在していたと言える。この点において，GAJ の分布と中央語史は整合しない。さらに，a，b，c の各類型において用いられる語形には地域差がある。語形の違いを捨象してこの三つの類型間に新古関係を想定し，日本全体の趨勢として a→b→c の変化が歴史的に起こったとみることは，適切でない。

つまり，地域社会における上下・親疎関係の分けかたの細かさ，および，その関係を対称詞の体系に反映する際の細かさについて，日本列島全体に渡る歴史的過程を導くことはここではできない。しかし，そうした人間関係のありかたや，その関係を言語的に反映するかどうかについては，東日本対西日本などの大局的な地域差があり，また産業や都市化の度合いによる局地的な差もあって，それが対称詞の使い分けかたにもあらわれると考えられる。各地域・各地点が一定の社会的・言語的背景を持っていたところに，個々の対称詞が伝播してきたり，時に社会構造が変化したりして，対称詞の体系が編成されてきたと見るべきであろう。

６　おわりに

以上，対称詞の使い分けについて品詞・語構成によって類型化して分布の分析を行った。これをまとめると，次のようになる。

- 全国的には二つの二人称代名詞を使い分ける地点が多いものの，山間部や遠隔地は新たな二人称代名詞の使用に消極的で，関東周辺では代名詞以外の形式も上位待遇で使用し，西日本では使い分けを細かく行うという地域差がみられる。
- 対称詞の各語形の歴史的関係については周圏論的な解釈を行うことができるが，語形の使い分けかたについては日本列島全体を一つの歴史的過程で捉えることはできず，各地域で別個に成立・変化したと考えるべきである。

１節でも述べたように，GAJ は男性インフォーマントを対象としているため，一般的により丁寧な発話を行うとされる女性の使い分けかたについては不明である。これについて別の資料を用いて明らかにすることが，今後の課題として残されている。

参考文献

池上秋彦（1972）「代名詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 2　名詞・代名詞』明治書院

大橋勝男（1999）「方言地理学と日本語史―対称代名詞から見た待遇表現史―」『日本語学』18 巻 5 号
加藤正信（1973）「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男編『敬語講座 6　現代の敬語』明治書院
加藤正信（1977）「方言区画論」大野晋,・柴田武編『岩波講座日本語 11　方言』岩波書店
国立国語研究所編（2006）『方言文法全国地図 6』国立印刷局
小松寿雄（1996）「江戸東京語のアナタとオマエサン」『国語と国文学』73 巻 10 号
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
永田高志（2015）『対称詞体系の歴史的研究』和泉書院
彦坂佳宣（2011）「対称代名詞の分布と歴史―『方言文法全国地図』「“あなた”の傘」の解釈―」『国語学研究』第 50 集
山崎久之（2004）『増補補訂版　国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院

付記　本稿は，日本語学会 2016 年度秋季大会で発表した内容に修正を加え，まとめたものである。発表に際し貴重なご意見を賜った先生方に，記して感謝申し上げる。

（岡山県立倉敷南高等学校　講師）